



Title	「ゆめ」こそ「ゆめ」
Author(s)	小林, 正嘉
Citation	大阪大学低温センターだより. 1985, 50, p. 13-14
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/8020">https://hdl.handle.net/11094/8020</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

将来についての夢を語るという機会を与えて頂きました。私自身は低温に関する造詣が浅い上に理論屋なので、だいぶピンボケの話になるかもしれませんが、その点御容赦願います。

物性物理学にとって過去半世紀というものは黄金の時代であったと思う。そしてその主流はやはり電子論であった。理由は簡単に種々の物性を決定する最も基本的な実体が電子（あるいはフォノン等の素励起）であった事、そしてその基本法則たる量子力学が今世紀初頭に発見され、相まって電子の挙動を探る実験手段が次々と開発された事による。もし、たとえばこの世の物性を担っている実体がW中間子やトップクォークであれば、まさにこれからが物性物理の黄金時代という事になったであろうが、幸か不幸か物性の主役は電子であった。今から半世紀前、物理屋の前には刈り入れを待つ無人の沃野が広がっていたが、今ではあらかた収穫は終わり縦横に走った道路を車が通っていく。

これからどういう方向に行くのかの予測は大変難しいが、何も言わないのも無責任なので少しだけ。まず考えられるのは計算機であろう。御承知の通りここ十数年の計算機の向上と普及はめざましい。（もっとも、皮肉な見方をすればこの強力なカンフル注射によって学問自体の限界が見えて来るのが少し先に伸ばされた丈かもしれない。）しかしここ当分計算機は我々に他の何物にも増して強力な武器を与えて呉れる事は確実であろう。特に大型計算機の availability に関しては日本の研究者は世界的にも恵まれている。これは多くの先人の汗と涙の賜物であり、今後これを駆使して優れた業績をあげるのは我々若い研究者に課された責務でもある。

原点に立ち帰り古きを見直すという事もある。ただし、以前と同じ様に見たのでは同じものしか見えるはずがないから、前人と異なった視点・発想の転換が必要である。自然というものは非常に多面的なもので、見る方の深さに応じて様々な側面を見せて呉れるものではないだろうか。私自身は統計力学の理論を専攻しており、其処に出てくる様々な非摂動的・非一体問題的概念に魅力を感じているが、具体的には各人様々であろう。

最後に繰り返すが、私は基本的には輝かしい収穫の秋は最早終わったと思う。無論、血眼で捜せば、未だ刈り入れ前の土地が残っているかもしれない。しかし今、時代が本当に必要としているのは刈り取る人ではなく種を播く人ではなからうか。種を播かずとも収穫が約束されていた幸福な時代は既に終わった。今こそ微妙ではあるが、大切な発想の転換が必要とされている様に思われてならない。“身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ”という言葉があるが、我々が次の時代の扉を開けられるかどうかは其処にかかっているのではなからうか。先の道は厳しいかもしれないが、土台、今迄が例外的にうまく行き過ぎたのだ。先人の残して呉れた多くの遺産もある事だし（多少は負の遺産もあるかもしれないが）状況はそれ程悪くはない。知恵と勇気と情熱に満ちた多くの若いチャレンジャーの出現を切望する。

## 「ゆめ」こそ「ゆめ」

工学部（博士課程） 小林正嘉

「ゆめ」とは一体何でしょうか。ここで恐らく編集者殿の意図に背を向ける様な自分なりの解釈を試みたいと思います。

「ゆめ」とは本来希望を意味する言葉であり、理想状態を表現する言葉であります。しかし問題はこの「ゆめ」が実際に実現された時には、最早それは「ゆめ」という言葉では説明されませんし、時にはそれが「ゆめ」であったことすらも忘れ去られてしまうという事です。従って真剣に「ゆめ」を論ずることは愚の骨頂であり、こちらが真剣になるほど「ゆめ」とはお偉くないと思います。

低温の世界には、「超」とか「極」の付く言葉がありますが、そのような言葉は最近では科学技術の分野一般でしばしば流行語のように用いられています。このような接頭語は或る意味で「ゆめ」を表現しており、これらの分野に従事する人々の「ゆめ」を表わした言葉と言えるでしょう。しかし人間は、即ちこのような言葉を造り出した人間は同時にこれらの接頭語を取り去ることに一生懸命になってきた筈です。

自然現象の基本は“アキレスにも追いつけない亀”とは違い、ビッグ・バンによってこの宇宙が出来上がって以来変わる事なく逃げて行く事もなかった筈で、それを暗に知っているからこそ人はその厚い面の皮を剥いで来たわけです。従って、「超」や「極」のつく言葉は、本来いずれその地位を剝奪されるものであり、そうすることが古くからの人間の楽しみとなって来たと言えるでしょう。今や新幹線も夢の超特急とは呼ばれません。それ故低温研究の将来について何を想うかと聞かれれば、「いつまでもこのような質問の対象になってはいけない」と答えたいと思います。

さてこのように低温の世界の地位の失墜を望むわけですが、それでも何か白けた存在にはなって欲しくはないと思います。世阿弥の「花伝書」に「秘すれば花なり、秘さずば花なるべからず」という言葉があります。低温の世界の姿がどの様に変わろうとも、例えそれがたいした物ではないにしろ、何かを秘めているが故に存在価値を持った世界であればと思います。少なくとも「ゆめ」を持った人間にとって秘めたる「ゆめ」の見い出せる世界であればと思います。

結局以上がある意味で私の無責任な「ゆめ」であるわけで、つまり「ゆめ」が「ゆめ」でなくなる事が「ゆめ」であり、同時に「ゆめ」が「ゆめ」として残っている事も「ゆめ」なのであります。非常に矛盾した話になってしまったかも知れませんが、きまぐれでしか「ゆめ」は語れないと思います。もし文句があれば「トリイサン」に文句を言って下さい。

## ゆ め

基礎工学部(修士課程) 白 井 正 文

今年は元旦以来「初夢」らしい「初夢」もみることなしに、松の内が明けようとしている。いや、本当は『夢』をみているのかも知れない。しかし、朝、目を覚ます頃には、すっかり忘れてしまっている。とにかく、最近では自分でも驚くほど『夢』をみなくなってしまった。少年の頃の無邪気で物事に感じやすい心を失いつつあるせいかも知れない。

眠っているときに見る『夢』とともに、醒めているときにみる『ゆめ』もまた、最近では御無沙汰している。幼なかりし頃とは違って、現実というやつがどうも目の前にちらついて、心の中に大きくふくらんだ極彩色の『ゆめ』も、みるみるうちに色あせてしぼんでしまいがちである。

\* \* \* \* \*